凝灰の箱庭

～愚弄される女探偵～

2

比久見野堅物

本作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件等とは一切関係ありません。
また、作中に登場する暴力的･性的な描写、または犯罪行為･非道徳的な行動については、
いかなる現実の行為も推奨・肯定するものではありません。
読者の方のご理解と自己判断の上でお楽しみいただきますようお願いいたします。

目次

登場人物 …… 4

#7. 部屋 …… 6

#8. 見物 …… 31

#9. 不屈 …… 34

#10. 剃毛 …… 56

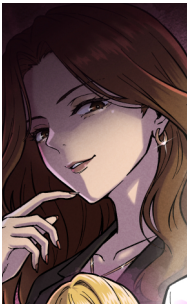
#11. 何故 …… 67

登場人物



■大杉麻帆 (おおすぎまほ 28 歳)

元警察官の探偵。身長 175㎝という長身と筋肉質なプロポーションを持つ、ショートポニーテールのイケメン女子。正義感が強く負けず嫌いな性格。その性格が災いし小さな不祥事にも強いこだわりを見せてしまい、警察上層部と関係が悪化し 5 年で依願退職している。以後は亡き父の探偵事務所の屋号を継いで私立探偵をやっている。主に浮気調査などが中心だが、収入が安定しない為、大手興信所の下請けなども行っている。自罰的な一面から身体を鍛えている。



■高三野美代子 (たかみのみよこ 50 歳)

妖艶な雰囲気が漂う美魔女。やや細身のバイセクシャル。その聡明で艶やかな立ち振る舞いから政財界にも顔が利く。表の顔は名だたる有名企業の役員名簿に外部取締役として名を連ねる財界の重鎮。裏の顔は半グレたちを束ねる反社の女王。自分の作り出した環境の中で他人が右往左往する様を眺めるのが大好き。警察官時代の麻帆のことを知っており、いつか手に入れたいと思っていた。



■轡田稔 (くつわだみのる 44 歳)

日焼けした肌に筋骨隆々のツーブロックゴリラ。190㎝はある大柄なナチュラル筋肉だるま。歯は全てセラミックに入れ替えており真っ白に輝いている。笑顔が好印象らしい。腕っぷしが強く、総合格闘技のアマチュア大会で優勝経験もある。人前で他人にマウンティングするのが大好き。



■地井義行 (ちいよしゆき 36 歳)

細身のメガネにぱさぱさの短髪、チンピラとは程遠い見た目の半グレ集団 DID の構成員。身長 167㎝しかないのでややコンプレックスを持っている。陰湿で偏屈、変態的な趣味を持っており、半グレとして手にかけた女性を執拗に追い詰めるのがとても上手い。用心深いつもりらしいが所々で詰めが甘い。



■矢部晴瑠耶 (やべはれるや 20 歳)
華奢でやや童顔な金髪の男。身長は 171㎝と地井より高い。ホストで半グレ集団 DID の構成員。そのどことなく幼さが残る顔と無邪気な言動と時折繰り出される甘い言葉が人気らしい。本名が昔からコンプレックスだったが、轡田がつけてくれた源氏名をとても気に入っている。余り頭が良くない。



■知来恵 (ちらいめぐみ)
捜索願が出されていたものの、何故か取り下げられてしまった女子大生。黒髪ストレートヘアで、私服時は地雷系ファッションを好んでいた。俗に言うぴえん系メンヘラ女子。東京の繁華街へと遊びに行ったまま行方が分からなくなっており、今回麻帆に捜索するよう依頼された人物。

■阿久井修二 (あくいしゅうじ)
麻帆が警察官時代に告発しようとした上司。メタボ体型だがその下は筋肉。経費を水増し請求して私腹を肥やしていたが、もみ消された。

■古井佑人 (ふるいゆうと)
麻帆の父親の時からの知り合い。大手興信所から私立探偵への仕事の斡旋などを行っている他、警察との繋がりも強い情報屋。華奢なイケオジ。

■三好佳奈子 (みよしかなこ)
麻帆の高校時代の同級生。話題の若手美人弁護士。黒髪ショートヘア。麻帆が仕事柄弁護士が必要になるといつも頼っていた。その逆もよくあった。お互いに仲が良い。

#7. 部屋

「... これを着ろってこと？」

　麻帆は左腕で胸を覆い隠しながら、用意された下着を持って不服そうな声で抗議した。

(あのジャケット、高かったのに ... ！)

　麻帆が入る前に脱いだ服は全て処分されてしまったようだ。そして代わりに用意されていたのは、紫色のやや煽情的なデザインのレースがあしらわれたブラジャーとショーツだった。

　ブラジャーは透けているレースの部分がかなり多いようだ。ショーツの方もクロッチ部分以外は透けているように見える。

「なんだぁ？不満かぁ？貧乏過ぎてあんな色気のない下着しか持っていないみたいだから、態々用意してやったんだぜ？」

　先ほどまでとは柄の異なる高そうなスーツに身を包んだ轡田が、ニヤニヤと笑いながら腕で胸を隠す麻帆を上から下まで舐めまわすように見ながら言った。

「あれは ... ！動きやすくするために決まっているでしょ！」

ホストクラブに直接乗り込む以外に手がかりを得られないと分かった時、麻帆は万が一に備えて一番動きやすい下着を身に着けていた。

いざとなれば、あんな華奢な男たちに後れを取るはずなどなかったのだ。

しかし現実はこうしてまんまと罠に掛かって囚われの身になってしまった。

「で、服がないみたいだけど。」

麻帆は下着をつけながら辺りを見渡した。

「部屋に用意してある。さぁ行くぞ。」

轡田がいやらしい手つきで腰に手を回しながら麻帆を促した。

「... こんな格好で歩き回れって言うの？！」

確かにここは屋内だが、これだけ広い邸宅だ。先ほど見かけたチンピラのような男たちも出入りしているのは想像に難くない。そんな男たちに今の姿を見られるのは屈辱以外の何物でもなかった。

麻帆が抗議すると、轡田が邪悪な笑みを浮かべながら答えた。

「なんだぁ？わざわざ用意してやったのに、お礼も言えないのかぁ？もしかしてドＭ探偵さんは裸の方が良かったかぁ？」

麻帆は慌てて目を逸らし、渋々礼を述べた。

「くっ … ありがとう … ございます。」

麻帆は轡田の意図にすぐ気が付いた。もしあのまま謝礼も述べずに反発していたら、この男は本当に麻帆のことを全裸のまま歩かせていただろう。

「おっ、素直に言えて偉いぞー。」

轡田がニヤニヤと笑いながら麻帆の腰の辺りからネットリと手を這わせるように降ろし、臀部を撫でたところで右の尻たぶを鷲掴みにした。

「っ …」

まるで轡田専属の情婦か何かのような扱いだ。反発しようとしたが、この男の裸体とその威圧感が脳裏にこびり付いて離れなかった。ただ屈辱的というだけでなく、本能的に恐怖を

感じているのを自覚してしまい、更に惨めな気持ちになる。

(まさか私 ... 怖気づいたとでもいうの ... ？)

　轡田は恐らく強い。それは間違いないが、実際にはまだ戦ったことすらないのだ。にもかかわらず、麻帆はこの男に逆らうことを無意識に避けようとしていたのだ。

(知来恵が人質にとられているのよ ... 下手なことできるわけないじゃない ...)

　麻帆はそう自分に言い聞かせることで、何とか思考に辻褄を合わせようとしていた。

　轡田は満足そうな笑みを浮かべると鷲掴みにしていた手を放し、麻帆の腰に手を回して進むように促した。

　脱衣所から出ると、真新しいコンクリートの壁にタイルの床が続くいかにもモダンな高級邸宅と言った雰囲気の廊下に出た。

　廊下の幅も大柄な轡田と麻帆が並んで歩いても十分な広さがある。轡田に促され、麻帆は浴場まで連れてこられた時と同じ道を戻る形で進んだ。

どうやらガレージのある半地下の階層へと連れて行きたいらしい。

すると階段からいかにもな半グレの下っ端と言った風貌の、安そうなスーツに身を包んだチンピラが上ってきた。

「っす。お疲れ様です … それが例の女探偵ですか？ … すげぇ …」

チンピラは麻帆の下着姿を舐めまわすように凝視した。

麻帆は今の自分の恰好を思い出し、思わず身体を隠そうとする。しかし轡田が麻帆の両手首を掴み、頭の辺りで押さえつけホールドアップのような姿勢を強制しそれを阻止した。

「なっ … ！やめっ … ！」

ただ普通に見られるよりもとても恥ずかしく感じられ、顔が熱くなるのが自分でも分かった。

「せっかく良い身体しているんだからしっかり見て貰えって。遠慮すんなよ。下着も似合っているだろぉ？」

轡田に意地悪く笑いながら言われ、麻帆は必死で轡田を睨み返した。

ふとチンピラに目をやると、まるで初めて見たポルノ雑誌に釘付けになっている小学生男子の様な目で、麻帆の身体を凝視していた。

「い、いつまで見てるの！変態！」

麻帆がチンピラに抗議すると、チンピラは舌打ちしながら道を開けた。

「言ったことは覚えているな？絶対に手を出すんじゃねぇぞ？」

轡田は笑いながらチンピラに言ったが、明らかに目は笑っていなかった。それが独占欲からなのか、それとも別の意図があるからなのかは麻帆には分からなかった。

(そう言えばこの男 ... あそこまでやっておきながら未だに私には手を出してこない ...)

麻帆は浴場での出来事を思い出した。

性懲りもなく浴場でも散々痴態を晒したのは不本意だったが、そこまでされてもなお一切本番行為に及ぼうとしてこなかったことに今更ながら気が付いた。

あの時轡田のそれは明らかに臨戦態勢の状態だったはずだ。

(機能不全とかじゃないみたいだし…なんで？…って何考えてるの！)

麻帆は自分の醜態と轡田の裸体を交互に思い出し、勝手に自己嫌悪に陥っていた。

道中更に別の半グレ達ともすれ違ったが、轡田に挨拶をしながらも視線は全て麻帆の身体に注がれていた。

どうせ隠そうとしても轡田に阻止されると思った麻帆は、今度は一切隠そうとせず大人しくしていた。

特に卑猥な言葉を投げかけられることもなくすれ違ったが、その視線は明らかに麻帆の胸、臀部、そしてそのすらりと伸びた脚に集中していた。

麻帆は改めて自分の今身に着けている下着のデザインを思い出すと、恥じらいから赤面し黙って顔を伏せることしかできなかった。

地下の部屋につくと、部屋の中央壁際にはダブルサイズのベッドに机、テレビ、そして引き出しなどといった家具が

置かれていた。入口とは反対側に更に引き戸も見えるが、部屋の中に窓は一切ないようだ。

　部屋の壁面は綺麗なコンクリート打ちっぱなしの壁だったが、中の家具の配置からホテルの一室を連想させられた。

　壁沿いに置かれたベッドのすぐ近くの壁面からはやや長めの鎖が伸びており、その先には革製の首輪が繋がっていた。

　そしてベッドの近くには帯のようなものが伸びた、白い長そでシャツのような服を持った地井がいた。

「お、本当エっろいなぁ ... 轡田さん、準備できましたよ。」

　そう言うと地井が服を持って麻帆の方に近づいてきた。

「ほら、お前専用のパジャマだ。今夜はこれを着て寝ろ。」

　下着姿で引き回されたことによる心細さと恥ずかしさから、一刻も早く服を着たくて仕方がなかった。

　麻帆は何の疑いも持たずに、轡田に言われるまま大人しく地井の用意した服を被るように着た。そして袖に腕を通したところで違和感に気づいた。

袖の先が完全に密閉されているのだ。それどころか、帯のようなものが閉じた袖の先から伸びている。

そもそもこのシャツはパジャマと呼ぶには布地が頑丈すぎるし、サイズも小さく動き辛い。

(これ … まさか … 医療用の拘束衣！？)

麻帆がはっとしたような顔をしたところで、地井がゲラゲラと笑い出した。

「今頃気づいたのか！拘束衣をこんなに素直に着る奴初めて見たわ！」

地井は笑いながら手際よく麻帆の周りに帯 … もといベルトを巻き付けていくと、後ろにある金具を止めた。

拘束衣のサイズがやや小さいせいか麻帆の大きめな胸が拘束衣越しにもしっかりと主張していた。

そして前で組むように拘束された腕がその胸を更に強調するような形になっており、まるで乳房を組んだ腕で自ら差し出しているかのような姿になっていた。

「本当は上下一体型にしたかったけど、それだと用を足せなくなって可哀想だとの意見がありましてね？」

　地井がニヤニヤ笑いながら解説するかのような気持ち悪い言い回しをしつつ、鎖に繋がれた革の首輪を麻帆につけて南京錠で留め具をロックした。

「一人で慰められなくて辛いか？俺が添い寝してやろうか？」

　轡田がいやらしい笑みを浮かべながら麻帆をからかう。

「なっ…そんなことしない！どうせ逃げないから一人にして！」

　麻帆は顔を真っ赤にしながら轡田に怒鳴った。

「そうかいそうかい。残念だなぁ。それじゃ、またな。」

　そう言うと轡田と地井は部屋から出て扉を閉めた。扉が閉まると、外から鍵がかかるような音が聞こえてきた。

「…はぁ。」

　麻帆は軽くため息をつくとベッドの脇に腰掛けた。麻帆が

座った位置から見て正面には丁度鏡もあった。

　鏡の中には、自らの腕で胸を強調するかのような姿勢で拘束され、煽情的なデザインをした紫色のショーツを丸出しにした間抜けな女が映っていた。

(... 無駄かもしれないけど、諦める訳には ...)

　麻帆は首輪と鎖を確認した。鎖はかなり長く、恐らくこの部屋の内部であれば自由に移動できそうだ。

　麻帆は立ち上がり鍵をかけられた出入り口と反対側の扉を確認した。扉は引き戸になっており、器用に足を使って開けると中は洋式の水洗トイレと洗面台があった。

(... なるほど。ここで用を足せってことね ... 問題は下着をどうやって脱ぐかだけど。)

　両腕を完全に拘束されてしまっているので、今の麻帆には下着を脱ぐ方法がなかった。部屋の中にある家具に頑張って引っ掛ければ脱げるかもしれないが、恐らく履くことはできないだろう。

(別に今すぐしたい訳じゃないし ...)

麻帆はベッドまで戻って腰掛けると辺りを見渡した。ただ監禁しておくのが目的にしては、妙に家具が充実している。本来は別の目的の為の部屋なのだろうか。

ふと部屋にあるテーブルを見ると、角がそれなりに尖っていることに気づいた。流石に鎖やベルトを切ったりすることはできなさそうだが、下着をひっかけて降ろすぐらいはできそうだ。

(いざとなればあれを使えばいけるかも ... でも ... これなら ...)

麻帆は思いついたかのように立ち上がると、鏡に向かって背を向けて拘束衣の背面を確認した。

拘束衣のベルトは固定されていたが、首輪とは異なり鍵のようなものは一切見当たらなかった。

(もしかして ... チャンス？)

麻帆は立ち上がってテーブルまで歩き、中腰になって背を向ける。そしてそのテーブルの角で拘束衣の留め具を引っかけて外そうと試行錯誤を始めた。

(お願い ... 当たって ... ！)

麻帆は必死に探りながらこすりつけたが、中々留め具が引っ掛かる気配がない。

しばらく格闘していると、きつめの拘束衣で必死にもがいていたせいか徐々に体が熱くなってきた。

相変わらずベルトの留め具が動いた感覚がない。

(... やっぱりダメ？)

麻帆は一度諦めて立ち上がると、呼吸を整えながら改めてテーブルを確認した。

黒色の金属で組まれた脚に、白い天板のテーブルだ。高さ的に、真っすぐ立つと丁度その角が股間の高さにある。

(... こんな時に何考えているのよ ...)

麻帆はあまり自慰行為を頻繁にする方ではなかったが、あんな目にあわされた挙句、轡田達に唆され、完全に意識してしまっていた。

生命の危機を感じると人間は繁殖を強く意識するという話もあるが、今の状況がそれではないだろうか。

(... 何を ... 馬鹿なことを ...)

麻帆は必死で頭の中に湧き始めた淫らな考えを振り払おうとする。

(...)

浴場での轡田の責めを思い出してしまい、身体の奥底が疼くような感覚を覚えた。

まるで催眠か何かにかかったかのようにゆっくりとテーブルへ向かうと、ややつま先立ちになりながらその角に股間を合わせる。

そのまま腰を沈めていくと、硬いテーブルの角が食い込み、麻帆の肉芽を強く圧し潰した。

想像以上の強い刺激に思わず腰が跳ね、麻帆はすぐさま我に返った。

「... ばっかじゃないの！」

麻帆は必死で取り繕うように言葉を絞り出し、何とか踏み止まった。

頭の中にある邪念を振り払うかのように激しく首を振ると、先ほどまでの淫らな行為の未遂をなかったことにするべく、もう一度必死で拘束衣の留め具を机の角にひっかける努力を始めた。

すると今度は少しだけ引っ掛けることに成功し、拘束衣のベルトが少し緩んだような手ごたえがあった。

(... やった！)

麻帆は同じ要領で必死にこすりつけ、何とか留め具を外した。留め具が外れたのを確認すると、今度は激しく身体を左右に捩じるようにもがき始めた。

徐々にベルトが緩んでいく感触がある。

(あと少し ... ！)

次第に腕が自由に動くようになり、何度か引っ張るようにもがくと無事両腕の拘束ベルトを外すことができた。

(... よし！ ... でもこれどうやって脱ごう ...)

両腕は自由になったものの、手が使えない上に、ややきつめ

の拘束衣は首輪をはめた状態では簡単に脱げそうになかった。

　部屋の中を探ろうとしたとき、出入り口の鍵が開き扉が開く音が聞こえた。

「えっ？」

　麻帆が驚いて出入り口の方を見ると、轡田と地井が戻ってきていた。

「ったくあのまま続けてりゃ最高の画が撮れたってのによぉ、なんでやめちゃったんだ？」

　轡田がニヤニヤと笑いながら麻帆に言った。

「なっ！…どうしてそれを…！じゃない！そんなことしてない！」

　麻帆は顔を真っ赤にしながら否定したが、そんな麻帆を無視するように地井が拘束衣のベルトを掴んだ。

「そんなことってどんなことだぁ？まだ何も言ってないのによぉ…まぁいい、素直になれないムッツリマゾヒストちゃんの為に、プレゼントを持ってきたからちょっと待ってな。」

　轡田はそう言って地井に目配せをすると、地井は麻帆が苦労して解いた拘束衣を元通りの拘束状態に戻してしまった。

　相変わらず余りの早さに麻帆が呆気にとられていると、轡田が麻帆の身体を掴んでベッドに押し倒した。

「ったくよぉ、どうしてウソつくんだよ？もっと素直になれよ？」

　麻帆は慌ててもがいたが轡田はビクともしなかった。

　轡田に気を取られていると、地井が麻帆の腰に革製のベルトのような拘束具を取り付けていることに気づいた。

「ちょっと、何するのよ！」

　麻帆は地井に抗議しながらも反撃の隙を伺うべく周囲を確認すると、ここへ連れ去られた時に車内で使われたマッサージャーと似たものがベッドに置かれていることに気が付いた。

「え、待って！それはもう嫌！」

　麻帆は慌てて足をばたつかせるが、轡田に抑え込まれて股を開いたような状態になってしまった。

「今回は大好きな股縄はないけどごめんねぇ？でもこれも好きでしょ？」

地井が意地悪くニタニタと笑いながら麻帆を煽った。

　地井が取り付けたベルトのような拘束具には股間の辺りに伸びたベルトがあり、その先にはリングのようなものがついている。

　そのリングは丁度マッサージャーの本体部分だけが通り抜けられる程度の大きさで、振動子部分が引っ掛かり抜けないようになっていた。

　地井が股間のベルトを締めると、マッサージャーの振動子が麻帆の股間にピッタリと押し当てられてズレる余地がなくなった。

「ぐっ … このっ … 変態 … ！」

　麻帆は精一杯地井を睨んで見せたが、地井は気にすることなくベルトをきつめに調整した。

　マッサージャーの振動子の部分が麻帆の秘裂にピッタリと密着するような形になり、否応なしにその存在を意識させられる。

「股縄が欲しくなったらいつでも言ってくれ。つけてやるよ。」

　地井がニヤニヤと笑いながら意地悪く言った。

「誰がっ！」

　麻帆は顔を真っ赤にしながら反論したが、車内での顛末を思い出すとそれ以上言葉が続かなかった。

「車の中のやつと違って色々とスペシャルな機能がついているから、楽しめるはずだよ？それじゃ、じっくり楽しんでね、変態ドＭ探偵さん。」

　地井が厭味たっぷりに言うと、マッサージャーの本体部分から先に伸びたコードを壁にある電源タップに刺し込んだ。あのタイプはプラグを刺した後回すことで簡単に抜けなくなるものだ。

「こんなの、気持ち悪いだけに決まっているじゃない！」

　麻帆は顔を真っ赤にしながら必死に反論したが、もはや説得力はなかった。

　自身の身体がいとも容易く欲望に屈することのない身体で

あって欲しかったという、己の願望でしかなかった。

　麻帆を押さえつけていた轡田が地井に聞いた。

「こいつガッツだけはあるから、またさっきみたいに抜け出すんじゃないか？鍵はかけないのか？」

　すると地井がニヤニヤしながら答えた。

「本当に変態じゃなかったら、こんな拘束あっさり抜け出してすぐに止めるんじゃないんですかね？鍵までかけちゃったら可哀想でしょ。」

　それを聞いた轡田は意地悪くニヤリと笑うと麻帆を煽った。

「だ、そうだ。汚名返上のチャンスだぞ、ムッツリマゾヒストちゃん？」

　轡田と地井に好き放題侮辱され、麻帆は黙って睨み返していたが、内心屈辱のあまり泣き出しそうになっていた。

　客観的に見れば今までの経緯からこれらは全て事実であり、一切反論の余地がないと言われても仕方がないことを自覚していた。

地井がマッサージャーを操作すると、あの時と同じく絶妙な強さでマッサージャーが震え出した。

「俺達はまだやることがあるからもう来れないが…明日の朝まで好きなだけオナり放題だぞ？よかったなぁ？」

そう言うと轡田と地井は部屋から出て行った。

この時、麻帆は振動に耐えながらも先ほどとの違いを聞き逃さなかった。部屋の鍵をかけた音が聞こえなかったのである。

(…これは…ここを抜け出すことさえできれば…！)

ベッドに押し倒されたまま横になっていた麻帆はすぐさま起き上がろうとした。

そして、この拘束の悪辣な仕組みを思い知らされることになった。

「ぁっくぅ！」

上体を起こしたところで、マッサージャーの振動子に自らの突起を押し付けるような形になり、突然股間に走った甘く

鋭い刺激に耐えられず再び仰向けになった。

(このっ … ！)

　息を荒げる麻帆は振動による甘ったるい痺れに耐えながら、何とか呼吸を整え、まずは思考を整理することにした。

(まずは … この拘束とマッサージャーを何とかしないと … 拘束衣は多分同じ要領でいけるけど …)

　いくらその手の用途の為に作られた道具であっても、振動が一定であれば慣れることはできる。何とか呼吸を整えて振動に慣れ始めると、麻帆は次の行動を考えた。

(このままじゃ起き上がってテーブルまで行くのは無理ね。まずはこのマッサージャーを止めっ？！)

　突然マッサージャーが先ほどより強めに振動し始めた。車内の時と同じランダムモードを搭載しているのだろうか。

「っ … ハッ … フゥ … フゥ … フッくっ …」

　今まで性的な事に執着がなく、絶頂に至るような経験をそこまで頻繁にしたことがなかった麻帆であったが、今夜だけで

一体何度絶頂したのだろうか。

　理性では気持ち悪いと思い込んでいたはずだが、下半身に染み渡るような振動によって堪えようのない甘い痺れがじわじわと広がっていく。

　まるで隠された性感を無慈悲にこじ開けられているかのようだ。

(こんなの … 酷い … 耐えられる訳が … ！)

　必死で声を押し殺しながら、麻帆はベッドの上で身悶えを続けていた。

(このままじゃ … また … ！)

　容赦のない振動に下腹部全体の感覚が支配され、思考がまとまらなくなってくる。

(とにかくこれを … 止め … ないと … ！)

　麻帆は拘束衣を解こうと仰向けになったまま必死にもがいた。

「うっ … ふぅっ … あっ … くっ …」

右腕を必死に振ろうとするがビクともしない。

「んう … ぐっ … ぁあぁ … ふっ …」

左腕を抜こうとしても全く動かない。

少しきつめの拘束衣と腕に強調された胸が、麻帆が暴れるのに合わせて動くのが分かる。

(さっきあいつらが来たのって … まさか今もカメラか何かで見てる？！)

そのことに考えが至った途端、ゾクゾクとした感覚が下腹部からじんわりと身体の芯を通って昇ってくる。

必死で腰を引いて逃がそうとするが、ベッドのマットに押し戻される感覚が振動子と股間の密着感を余計に際立たせるだけだった。

右へ左へと腰を捻るもベルトで固定されたマッサージャーが外れる様子もなく、どこまでも麻帆の秘裂を的確に密着して刺激し続ける。

「あぁ … いやぁ … いやっ … いやだ … ！」

か細く上ずった声で、必死で快楽を否定し上半身を揺する。拘束衣の擦れる音、恥骨へ響く振動音、下腹部に溜まった熱。その全てに思考が塗りつぶされていく。

麻帆が嬌声をあげると、振動が更に強くなった。

どこかへ腰を逃がしたいのに、どこにも逃げ場がない。

右も、左も、後ろも。どこまでもついてくる。

「んぐっ…！くっ…！くぅぅぅ！」

麻帆は腰を前へと突きだしながら数回痙攣するように震わせると、最後の抵抗として必死に声を押し殺しながら絶頂した。

#8. 見物

深夜、文京区にある高級マンションの最上階。

モダンでシックな家具を取り揃え、優しい明るさに包まれた落ち着いた空間にあるモニターの 1 つに、部屋の雰囲気にはとてもそぐわない、いかがわしい映像が流れていた。

拘束衣を着用し、股間に卑猥なアダルトグッズを装着したまま喘ぎ声を抑えようと、ベッドの上で身悶えを続ける麻帆の姿を映したものだ。

そのモニターの様子を時折見ながら、デスク上の PC の画面を眺めて満足気な笑みを浮かべる妖艶な雰囲気の女性がいた。

アラサーと言っても通じる程の肌の張り、艶やかで繊細さを感じさせる線の細さを持ちながらも、そこから漂う雰囲気は経験豊富な美魔女といったところだった。

高三野美代子、50 歳。その実年齢を聞くと誰もが驚きの声をあげる。

表の顔は複数の事業を抱えるやり手の実業家であり、その実力と美貌で政財界の重鎮を次々と虜にしていた。

しかしその裏の顔は、社会の暗部に巣食う半グレを自在に操る闇の女帝と言っても過言ではない存在であった。

彼女はバイセクシャルでありながら、性行為においては自身が直接行為の一員になるよりも、他人の行為を観察することこそ至上とする趣向を持っていた。

彼女の趣味 ... それは、自身が用意した舞台の上で、登場人物が右往左往する様を眺めることだった。

自分が作り上げた箱庭の中に置いた人形が勝手に動き回る ... 但し、自分の箱庭の中からは逃れられない。

そんな状況を楽しむことができるのは、彼女のような上級国民の特権であり、まさにその為にこの地位まで昇りつめたようなものだった。

彼女のデスク上にある PC の画面には、複数の動画が映されていた。その一つは、車載カメラの車内側のようである。時刻表示から、録画であることが分かる。

轡田と地井に挟まれ暴れていたトレンチコートにサングラスの麻帆がひときわ大きく身体を震わせたかと思うと、静まり返った車内に響き渡る失禁音がしっかりと記録されていた。

別の映像では、浴場で轡田に組み付かれたまま、激しく手淫をされ蕩けるような顔をしている全裸の麻帆が映っている。

更に別の映像では、脱衣所の様子が映っていた。化粧の濃い売春婦のような女に対して、彼女が麻帆と比較して如何に下賤な存在かという罵倒を浴びせながら、激しく腰を打ち付ける轡田の姿が流れている。

「思った通り … あなた達最高よ。これからが楽しみだわ。」

高三野美代子は満ち足りた様子でつぶやいた。

凝灰の箱庭

～愚弄される女探偵～

2

作：比久見野堅物
絵：やきのりや
サークル：ぎるてぃらびりんす
発行日：2026/10/11
X：@girutiirabirins
pixiv：https://www.pixiv.net/users/120140144